

2022 年度 防災教育 チャレンジプラン 活動報告会

Disaster Management Education Challenge Plan Competition

2022 年度
防災教育
チャレンジプラン
成果発表

2023 年度
防災教育
チャレンジプラン
決定・発表

日時 2023 年 2 月 11 日 (土) 13:00 ~ 17:30

開催形式: オンライン



www.bosai-study.net

主催: 防災教育チャレンジプラン実行委員会、内閣府(防災担当)、国立研究開発法人防災科学技術研究所

共催: 一般社団法人防災教育普及協会

後援: 消防庁、文部科学省、国土交通省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、日本赤十字社、全国都道府県教育委員会連合会、日本PTA全国協議会
防災未来賞ぼうさい甲子園事務局



河川
基金

公益財団法人河川財団による
河川基金の助成を受けています。

防災教育チャレンジプランとは？

■ 防災教育チャレンジプランの目的

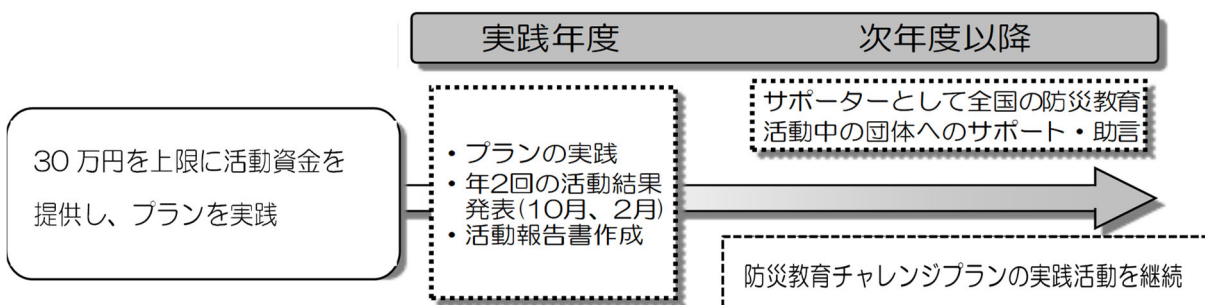
国内外で大規模な災害が起きている昨今、またいつ災害がやってくるかわかりません。防災教育チャレンジプランは、このような災害に備え大切な命を守り、できるだけ被害を減らし、万が一被害があった時すぐに立ち直る力を一人一人が身につけるため、全国の地域や学校で防災教育を推進するためのプランです。

全国各地の防災教育への意欲をもつ団体・学校・個人等に対し、より充実した防災教育のプランを募集し、「防災教育チャレンジプラン」として選出した上で、その実践への支援を行います。

1年間の実践の後、その実践例や支援した取り組みの内容を活動報告会を通じて広く公開・共有するとともに優れた実践の表彰を行うことで、全国の防災教育に取り組む団体・学校・個人やそのプランに光をあて、各地域で自律的に防災教育に取り組むことのできる環境づくりを目指します。



■ 防災教育チャレンジプラン実践団体の構成と実践スケジュール



実行委員の紹介

(委員長)

林 春男	国立研究開発法人防災科学技術研究所 理事長
池田 真幸	国立研究開発法人防災科学技術研究所 災害過程研究部門 特別技術員
市川 啓一	株式会社レスキューナウ危機管理研究所 代表取締役
井上 浩一	防災ネットワークプラン 代表
鍵屋 一	跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 教授
金田 義行	香川大学四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構 副機構長・地域強靱化研究センター長・学長特別補佐・特任教授
木村 玲欧	兵庫県立大学環境人間学部・大学院環境人間学研究科 教授
国崎 信江	株式会社危機管理教育研究所 危機管理アドバイザー
栗田 暢之	認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 代表理事
酒井 慎一	東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 教授
佐藤 公治	南三陸町立歌津中学校 主幹教諭
佐藤 健	東北大学 災害科学国際研究所 防災実践推進部門防災教育実践学分野 教授
澤野 次郎	災害救援ボランティア推進委員会 委員長
諏訪 清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
田上 順一	特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク 事務局次長
中川 和之	株式会社時事通信社 解説委員
平田 直	東京大学 名誉教授
福和 伸夫	名古屋大学 名誉教授
舩木 伸江	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科 教授
舟生 岳夫	セコム株式会社 I S 研究所リスクマネジメントG 主務研究員
松尾 知純	防災ゲート・パートナーズ 代表
南島 正重	東京都立両国高等学校附属中学校 主任教諭
村山 猛	千葉県教育庁企画管理部 教育総務課 人事給与室 障害者雇用推進班 主幹
岡本 弘基	国土交通省水管理・国土保全局防災課 防災企画官
佐藤 茂宗	消防庁国民保護・防災部防災課 地域防災室長
村上 威夫	内閣府政策統括官（防災担当）付 参事官（普及啓発・連携担当）
森本 晋也	文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 安全教育推進室 安全教育調査官
吉田 和久	文部科学省研究開発局地震・防災研究課 防災科学技術推進室長

(2022 年 11 月 30 日現在、所属役職別 50 音順、敬称略)

プログラム

13:00 開会			
13:00 開会挨拶			
防災教育チャレンジプラン実行委員長 内閣府大臣官房審議官(防災担当)		林 春男 上村 昇	
13:10 2022 年度 実践団体発表① 司会： 防災教育チャレンジプラン実行委員 船木 伸江			
13:10～	① 愛知県立ひいらぎ特別支援学校	※発表 1 団体 10 分＋全体予備 15 分	
13:20～	② 静岡県立駿河総合高等学校		
13:30～	③ 江戸川区立一之江小学校		
13:40～	④ 2011 team 釜石小ぼうさい		
13:50～	⑤ 見てみよう!常総市の会		
14:00～	⑥ 犬山市立楽田小学校		
14:10 2022 年度 実践団体発表② 司会： 防災教育チャレンジプラン実行委員 鍵屋 一			
14:10～	⑦ 減災 Days		
14:20～	⑧ 東京都立調布特別支援学校		
14:30～	⑨ 愛知工業大学名電高等学校		
14:40～	⑩ 愛知県刈谷市井ヶ谷町内会体育部		
14:50～	⑪ 信州大学観光防災マップ活用グループ		
15:00～	⑫ 文京 de BOSAI		
15:25 休 憩 《10分》			
15:35 2023 年度実践団体 プラン発表・意見交換会			
ブレイクアウトルーム方式で実施 ※下記、防災教育チャレンジプラン 2023 年度実践団体(12 団体)と 2022 年度実践団体(12 団体)、防災教育チャレン ジプラン実行委員が各ルーム内で意見交換を行います			
グループ A 司会：佐藤公治委員		グループ B 司会：村山委員	
グループ C 司会：池田委員		グループ D 司会：南島委員	
<2023 年度防災教育チャレンジプラン実践団体> ① 株式会社オンテック X-Bridge プロジェクトグループ ② 兵庫県立明石北高等学校 ③ 関西学院千里国際中等部 ④ 淑徳大学 地域共生センター ⑤ 石巻市立桃生中学校 ⑥ 下北 BOUSAI ネットワーク(むつ市内4校合同プロジェクト) ⑦ 出張！ふれあいルーム ⑧ 岡山市立操南中学校 ⑨ 東京都立調布特別支援学校 ⑩ 泉南市立西信達中学校 ⑪ よんなな防災会学生部 ⑫ 見てみよう！常総市の会 1. 趣旨説明 5 分 2. 意見交換会 60 分 3. クロージングセッション 15 分 計 80 分			
16:55 休 憩 《10分》			
17:05 2022 年度 防災教育チャレンジプランの表彰			
表彰団体発表			
17:20 2022 年度 防災教育チャレンジプランの講評			
防災教育チャレンジプラン審査委員長		渡邊 正樹	
17:25 閉会挨拶			
防災教育チャレンジプラン実行委員長		林 春男	
17:30 閉会			

※15:35 より、別ルームにて 2022 年度防災教育チャレンジプラン審査委員会を開催

①愛知県立ひいらぎ特別支援学校

プラン名

防災学習で学ぶ「命の守り方」 ～自分で・学校で・地域で～

プランの対象

小学校の部～高等学
校の部

所在地

都道府県：愛知県
市町村： 半田市

ープランの目的・ここがポイント！

身体障害のある児童生徒の「命を守る」ためにはどのような学習や支援をすべきか。3つの柱で学校全体の防災力・減災力を高めていく。

小学1年生から高校3年生までの年齢差・実態差のある児童生徒がどう取り組んでいくのかがポイント。

ープランの概要

- 1 「自分で守る」…全校の児童生徒が主体となり、災害に対する意識を高める活動をするとともに日頃から安全に過ごすための方法について考える。
- 2 「学校で守る」…教職員やPTAが主体となり、防災マニュアルを見直したり、研修や体験をとおして学校でできる対策について考える。
- 3 「地域で守る」…市役所や近隣の学校をはじめ、地域の人とつながり、災害時に支えあう関係作りを進める。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

児童生徒、教職員、保護者、関係諸機関の全体的な防災力・減災力の向上。

「自分ごと」として、防災について考え、行動できるスキルの向上が期待される。

ー成果として得たこと

【自分で守る】

児童生徒からのアイデアをもとに活動を進めてきた。校内安全パトロールや防災ソング、ポスターの作成により防災が身近な話題となり、日常生活の中で安全に過ごせる環境を意識できるようになった。

【学校で守る】

教職員の防災スキルが上がり、児童生徒の命を守ることに加え、組織として防災を捉えることができるようになってきた。また、保護者が家庭での防災について、考えを深めるきっかけにもなった。

【地域で守る】

市役所や社会福祉協議会との連携が深くなったことに加え、これまで関わりのなかった企業と連携するきっかけとなり、障害のある人が災害時に何を必要とするのかを伝えることができた。学校内だけの取組ではなく、学校の存在や障害のある児童生徒の実態、学習の取組など、積極的に地域に発信していく必要があることが分かった。

ー全体の反省・感想・課題

災害時の行動を考えるにあたり、まずは建物（校舎）の構造や地盤などの立地条件を知り、考察・判断することが重要であると知った。

小学1年生から高校3年生までの幅広い年齢層に加え、さまざまな障害のある児童生徒と一緒に活動できるよう、役割分担をして取り組んだ。市役所や企業との連携では、その管轄や業務体制により難しさがある。地域との関わりをどう生かすかが課題である。

ー今後の継続予定

今回の取組をきっかけとし、それぞれの取組を継続する。また、その取組を積極的に地域等に発信し、発展させていきたい。



②静岡県立駿河総合高等学校

プラン名

地域防災コミュニティプロジェクト

プランの対象

生徒・地域住民
企業・行政・大学生

所在地

都道府県：静岡県
市町村： 静岡市

ープランの目的・ここがポイント！

- ・本校入学者全員（本年度は、高校2年次生240名）が学習、実践を行う。
- ・11施設（行政、企業、町内会、高齢者施設、こども園、国際機関、多文化施設、女性会館、消防局）と協働し学習、実践を行う。
- ・静岡大学の学生が高校生の学びに伴走し、年間授業に関わる。
- ・アウトプットベース（調べて発表）ではなく、アクションベース（やる、創る）で取り組む。

ープランの概要

5月 講義（静岡市の防災、自助・公助・共助、ハザードマップ） 6月 フィールドワーク
7月 中間発表①（企画書） 8月 フィールドアクション 9月 アクション報告
11月 中間発表②（成果と仮説） 1月 最終発表（今後の展望）

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ・1年間をかけ週1時間継続的に学習、実践するというカリキュラムにすることで持続可能を狙う。
- ・課題を自分ごととし、地域コミュニティの形成・醸成を狙う。
- ・防災コミュニティプロジェクトの授業を通じて校外とつながることで、自主的に地域に飛び出す生徒がいた。
- ・様々な大人や子ども、大学生と協働することで多様な視点を取り込み、ソーシャルスキルを自発的に獲得することができる。

ー成果として得たこと

- ・長期的に学習、実践したことで地域とのつながり、新たなコミュニティが生まれたこと。
- ・アクションを起こすことで、高校生が自分たちにできることがあることを実感できたこと。
- ・授業を飛び出し、自主的な活動ができたこと。
- ・防災の取り組みを地域に発信できたこと。
- ・協働施設、大学と年間授業を計画的に（カリキュラムとして）行えたことで、次年度につなげることができる。
- ・1学年240名で取り組んだことで、防災意識向上が期待できる。
- ・防災を通じて人とのつながりが生まれたこと。
- ・防災の知識が身についたこと。

ー全体の反省・感想・課題

- ・11か所のフィールドワーク先との連絡調整や内容の企画に苦労した。ねらいを共有し、連携先の多大なるご協力とご尽力のおかげで、有意義な活動になった。
- ・60チームが同時進行で活動したため、その把握や伴走が難しかった。静岡大学公式LINEや来校サポートのおかげでチーム個々への適切な支援・助言を得られた。
- ・チームによって活動の差が生まれる。（自走するチームと停滞するチーム）
- ・「本当に効果があるか」検証が必要。（ポスターを貼る・SNSで発信するだけで、社会的インパクトはあるのか）
- ・効果的な活動にするためには、情報収集・分析、文献調査がもっと必要。
- ・生徒が自主的に校外へ出る際のリスク管理。



ー今後の継続予定

令和5年度も現1年次生全員（244名）が、1年間をかけ同様の学習、実践を行う。

③江戸川区立一之江小学校

プラン名

備えよう、まさかのために！ 作ろう、一之江防災プラン！

プランの対象

小学校児童、保護者、
地域、区役所、消防署

所在地

都道府県：東京都
市町村：江戸川区

一プランの目的・ここがポイント！

- 1 「まさか」の状況にすぐに対応できる具体的な「指針」（ペーパーベース）と、「行動」（活動ベース）をセットにした「一之江防災プラン」を構築する。
- 2 荒川及び中川に挟まれた立地から、台風や大雨、津波等による浸水や、地震による建物の倒壊等が想定されるため、学校（児童・教員）と保護者・地域・行政が連携して防災意識を高め、災害時に備えるとともに、命の確保が安全にできるよう見通しをもたせる。

一プランの概要

- ・クロスカリキュラムによる、防災授業の実施
学習発表会、防災講演会、関連施設への校外学習の実施
- ・イベントの実施
「一之江防災チャレンジ」を8月に実施（役所、消防署、地域、保護者の連携）
避難所連絡会、避難所開設訓練、防災講演会の実施
- ・「一之江防災プラン」の作成
地域の実態に即した資料集、リーフレットの作成

一期待される効果・ここがおすすめ！

- ・役所、消防署、地域が一体となった取組
- ・子供たちが地域で学び、地域を知る学習の実施

一成果として得たこと

- 防災イベント「一之江防災チャレンジ」の実施
 - ・学校、保護者、地域、行政の連携体制が深まった。
- 防災をテーマとした学習発表会
 - ・子供たちの防災に対する意識が高まった。
- 「一之江防災プラン」の作成
 - ・資料集、リーフレットを作成し、非常時対応の見通しがもてるようになった。
- 防災講演会、授業公開
 - ・保護者の認識が深まった。

一全体の反省・感想・課題

- 地域をよく知ること
 - ・実践を通して、指導にあたる者が地域への理解をもっと深める必要があると感じた。このことは、課題でもあり成果でもある。
- 関係機関との連携を密にすること
 - ・コロナ禍の中で、学校と地域、関係機関との連携が希薄になっていたと感じた。今回の実践が相互の連携を深める入り口になったので、今後の連携を密にしていきたい。



一今後の継続予定

- ・持続可能な年間指導計画の作成
- ・役所、消防署、地域との連携の強化

④2011team 釜石小ぼうさい

プラン名

災害伝承 2011 team 釜石小の軌跡 『このたねとばそ』

プランの対象

小中学生、地域住民
教育関係者、一般

所在地

都道府県：岩手県
市町村：盛岡市

ープランの目的・ここがポイント！

東日本大震災発災時に、下校後で学校管理下外にいた釜石小学校の子どもたちは一人一人の判断で全員が津波から自分の命を守り抜いた。震災から 11 年が経過し、記憶、伝承の風化は進んでいる。

そこで、本プランでは、当時の学校、教職員、子どもたちの状況や手記、原点である釜石小学校の防災教育等を記した本『このたねとばそ』を発刊した。特に、当時釜石市の防災教育をご指導くださった片田敏孝氏（現東京大学大学院特任教授）にご執筆いただき、貴重な一冊となった。

また、災害伝承や防災意識の向上を目指し、津波を生き抜いた子どもたち（現在大人）が講師となり、現在の小学生に「東日本大震災伝承フィールドワークとパネルディスカッション」を行った。

ープランの概要

- ①東日本大震災伝承本『このたねとばそ』の発刊にチャレンジ
- ②『このたねとばそ』の拡大配布にチャレンジ～Googleformアンケートによる検証～
- ③東日本大震災伝承フィールドワーク・パネルディスカッションにチャレンジ

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ・『このたねとばそ』は、災害伝承、これからの防災教育の参考になる貴重な冊子である。
- ・「フィールドワーク、パネルディスカッション」の津波を生き抜いた当時の子どもたち（現在大人）の話には説得力がある。現在の小学生にとっては憧れの先輩でもある。防災意識の向上はもとより、人間としての在り方生き方について考える機会となる。

ー成果として得たこと

- ① 11年前の東日本大震災時に学校、教職員、子どもたちが何を考え、どう動いたか、震災前の防災教育の取組と、震災後の学校や子どもたちの歩み等について、後世に伝える伝承本『このたねとばそ』を作成することができた。
- ② 読者アンケートから、子どもたちの軌跡、防災教育の具体的な方策、学校教育の在り方等に深く感銘を受けていただいた。ぜひ多くの人に読んでほしい、増刷をという声がたくさんあった。
- ③ 津波を生き抜いた子どもたちと、現在の小学生が実際の避難経路を体験したり、直接話し合ったりすることは新たな発見と防災意識の高揚につながった。

ー全体の反省・感想・課題

東日本大震災発災時から学校、教職員の動き、子どもたちの行動、震災以前から行っていた防災教育等を当時の記録をもとにまとめた『このたねとばそ』は、これからの学校、地域、一般住民に「自分で自分の命を守る」ことを伝承するものであることを読者アンケートから確信した。

また、津波を生き抜いた子どもたちは、11年の月日を経て、災害時に自分で自分の命を守り抜くことを伝えられる大人、地域の防災を支える大人に成長したことも確信した。

課題は、本チャレンジで行った活動を今回だけのものに終わらせず、継続することである。



ー今後の継続予定

伝承本『このたねとばそ』は、来年度釜石市で増刷し、市内教職員全員に配布予定。また、釜石市の津波伝承館「いのちをつなぐ未来館」のHPにアップしていただいた。フィールドワークは「東日本大震災伝承フィールドワークバトンプロジェクト」として、年1回実施し、バトンをつなぐ。

⑤見てみようよ！常総市の会

プラン名

オープンストリートマップでつくる水害6年目の常総市地図

プランの対象

常総市内および市外の
一般

所在地

都道府県：茨城県
市町村：常総市

ープランの目的・ここがポイント！

- ・（平成27年関東東北豪雨災害から6年となる常総市において）水害の記憶を次世代に継承する
- ・水害の記憶の振り返りを、観光振興と抱き合わせた取組で推進する
- ・コロナ禍状況を踏まえ、リアルイベントだけでなく、これにweb空間の集合知構築を組み合わせたハイブリッド展開で、新しい市民参加防災活動のかたちをつくる

ープランの概要

Web 上無料オープンプラットフォーム「オープンストリートマップ（OSM）」を水害記憶の風化が進む常総市の水害メモリアルまちあるき地図作りに活用する。実施行程としては、①リアル街歩きイベントを中心市街地・水海道で1回実施し、参加者に街にまだ残る水害の痕跡（影）や街の面白い場所（※）を撮影してもらい、それを街歩き後の振り返り会で OSM にコーディネーターがアップしていく（→痕跡地図の初回作成）。②この地図は web 上にあり、新しい観光情報や災害危険箇所などを随時追加していける。③リアルイベント＆振り返り会の模様と OSM についての説明・利用法解説を載せた記録集を作成配布する。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ・水害の記憶が薄れつつある中、新たな手法で関心を喚起できる
- ・web上で参加できる新しい形での展開で、空間的・時間的・身体状況の制約を超えた、広がりのある防災の動きをつくることができる

ー成果として得たこと

- ・「オープンストリートマップ（OSM）」を水害メモリアル地図づくりに初めて活用した。このフォーマットは、今後の情報追加・更新に継続して使うことができるため、Web 空間上のメモリアル充実化を呼びかけられる、継続的な記憶継承活動のよりどころを得ることができた。
- ・OSM上のポイント掲載箇所を写真で記録する機会としてイベントを企画し、コロナ禍にあって参加者を集め「水害の痕跡を街中に探す」ウォークの試みを実施できたことは成果だった。
- ・単に街中の水害痕跡探しだけでなく、参加者の楽しみとして地元の寺での歴史講和をセットにしたことでイベントそのものが好評だった（水害の事実そのものに関心が薄れつつある中で、現在の市民の感覚からみた“ゆしみ”の部分と水害記憶継承をセットにすることで記憶継承を図るあり方を確立できた）。

ー全体の反省・感想・課題

- ・イベント内で撮影した写真をOSMにアップロードする時間がかかり、結果的には、振り返り会時間中の“協働的地図づくり作業”はOSM 経由での地図上プロットは一部にとどまり、手動でのマップ上プロットとなった。オープンストリートマップのハンドリングとしては、リアルイベント時の共有には向かないことがわかった。



水害痕跡写真撮影ウォーク開始
と撮影写真の地図上プロット



ー今後の継続予定

- ・イベント時アップロード共有には適さない OSM であるが、無料で地図フォーマットを共有・更新できる点は引き続き有効。この「オープンストリートマップ」充実化を呼び水とし、かねてからその必要性が認識されてきた“水害資料館”をweb上で立ち上げていく準備活動を 2023 年度内をかけて継続実施する（水害資料館建設提案は行政に過去出しているがハード建設は予算的に不可能な為）。

⑥犬山市立楽田小学校

プラン名

Let' s プロテクト 犬山

プランの対象

小学4年～6年生
楽田小職員

所在地

都道府県：愛知県
市町村：犬山市

ープランの目的・ここがポイント！

犬山地区の東部は山に囲まれていて、地域には砂防ダムが各地にある。また、砂防ダムが展示されている公園（小野洞川砂防公園）がある。この公園の見学や管理者の解説を聞くことで、地域の防災施設をより深く知ることができるだろう。

さらに、本地区は木曽川扇状地に位置している。尾張藩と木曽ヒノキの関係性を紐解いていかないと、入鹿池の存在や地域にある田を語ることはできない。防災を中核にしながら、子どもたちは自分の未来をどのように作っていくかを考え、思考することを本プランの目的とする。

ープランの概要

防災教育において社会と理科の親和性は高い。4年生は郷土の暮らしと水の行方、5年生において、社会の「低い土地の暮らし」を起点に、理科の川の学習で災害について学ぶ。6年生は地学的な歴史と人文学的な歴史を関連付けながら楽田の歴史を紐解く。最終単元として、今後、我々の暮らしをどのように変えていけば、災害が起こったとしても、持続可能な生活ができるか議論をして、自分なりの考えをまとめることにする。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

☆社会と理科のカリキュラムマネジメントで、効果的な学習

☆地域素材の活用をすることで、主体的な学びを引き出す

☆継続的な活動を目指すための仕掛けづくり（職員の現職教育・教室環境づくり）

ー成果として得たこと

本年度実践で、楽田小学校独自のカリキュラムをほぼ完成させたと考えている。地域の出来事（災害等）と、通常の教科のカリキュラムを関連させながら無理のない展開を作り出しつつ、主体的な学びを引き出すことができたと考えている。



ー全体の反省・感想・課題

赴任して3年目の今年は、意識して仕事を任せるようにしてきた。2年目にまいた種が利いていて、実践もスムーズにいくことが多く、新しい試みを多くの学年で挑戦していた。だが、関係ない学年から、もっと全体で実施すべきとの声もあった。

ー今後の継続予定

防災学習は、カリキュラムの観点から、どうしても高学年で実施することが多くなっている。どの職員にも意識することができるよう、職員の現職教育（郷土学習）に力を入れていきたい。

⑦減災 Days

プラン名

幼児からスタートする切れ目ない防災教育

プランの対象

園児

所在地

都道府県：山形県

市町村：山形市

ープランの目的・ここがポイント！

昨年度防災教育チャレンジプランのご支援を頂き、山形県中山町で民・官・学の連携でスタートした「幼児からスタートする切れ目ない防災教育」今年度は小・中学校実施の部分は自走する部分となり、防災教育チャレンジプランでは幼児教育機関での遊びを通じ「プレ小学生」としての生活をスタートさせる年長児さんへの幼児型アクティブラーニング防災教育が目的・ポイントとなります。

また、園の教育に合わせ4月の入学に向け「幼児と保護者」への防災教育活動（子どもたちの学びの共有・家庭防災への波及効果）として、プログラムの要点をまとめた動画配信を実施し、4月からスタートする小学校教育での防災教育へのスムーズな連動と学校防災への理解に発展・寄与し、現幼児教育の課程の中にスムーズに導入できることが目的・ポイントとなります。

ープランの概要

新型コロナ感染症への対応や、教育課程に沿うプログラムということを重点としたため、園にての実施（うんどう・リズム・読み聞かせをベースにしたプログラム、またNHK放送局との協働）が1月からのスタートとなりました。また、動画配信についても2月中旬から春休みなどを目途に行ってまいります。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

実施することが教育課程に沿っているため、今後の園の活動では年間スケジュールに組み込めること。また、切れ目ない防災教育として小学校教育への効果があり、防災意識の熟成に役立つこと。

ー成果として得たこと

幼児教育時に園の教育に沿った防災教育（園の安全教育とは別の視点で）との出会いがあることで、子どもたちの防災教育の熟成はもちろん、町内全園・全小学校での実施ということの結びつきが「小1の壁」といような環境の変化による心の葛藤を生みにくくしていると、関係した先生方の声から、子どもたち、また先生方の意識の変化として成果を感じた。

またプロトタイプとして作成している物語を通して、災害への理解は勿論、防災・減災は怖いという恐怖観念からの教育という切り口ではなく、防災教育がもっと体感的に、環境的に、子どもたちにもいのちを守るための学問（体験）であるということへの認識・理解が深まったと感じる。知らないから怖いのであり、いつもの体験（教育課程に沿った防災教育）を行うことで、スムーズに興味を発掘し、楽しい体験からその後の学びを自走して深められるという心の教育に寄与していると感じている。

ー全体の反省・感想・課題

今年度の実施については、開始当初に園の年間スケジュールに組み込むことができず、社会的状況（園の立ち入り制限や実施者の県外移動などでの実施不可能期間等の感染症対策）に影響され、実施調整に時間がかかり、実施が年明けとなってしまったという反省がある。

ー今後の継続予定

今年度の反省を生かし、3月に開催される連絡調整会で年間スケジュールへの組み込みを提案していく。実施に関しては事業に対する行政の予算化や他の社会人の参入を目指しプロボノ（企業や大学生）や町民（切れ目ない防災教育サポーターの養成）との協働を拡大し、子どもに関わる大人を増やしていく。



⑧東京都立調布特別支援学校

プラン名

コロナ禍における持続的に発展可能な福祉避難所開設計画

プランの対象

児童・生徒、教職員、
保護者、地域住民等

所在地

都道府県：東京都
市町村：調布市

ープランの目的・ここがポイント！

コロナ禍にあって、地域のニーズに応える福祉避難所の速やかな開設の仕組みづくりを行うプラン。コロナ禍をマイナスと捉えず、新しい工夫を生み出すためのものとプラスに捉え、ユニークな防災の取組を展開する。時代の変化や災害の多様化に対応した、利用者が安心できる福祉避難所の実現を目指しながら、人が変わっても受け継がれていくような持続する仕組みを検討する。

ープランの概要

- ・あらゆる災害に対応できるような実践的な訓練を行う。
- ・福祉避難所の開設に役立つ最新の知見の収集と資料の紹介を行う。
- ・建物の入口をリモートで開錠する仕組みを検討し、望ましい形を見いだす。
- ・特別支援教育のノウハウを生かして、利用者が安心できる福祉避難所の実現に近づける。
- ・関係機関と協議し、「持続的に発展可能な福祉避難所開設マニュアル」を作成する。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ・福祉避難所の開設に向けた意識の醸成が地域ぐるみで図れる！
- ・様々な防災の取組を通して、地域との連携をより強固なものにできる！
- ・災害時の実践的な対応力に磨きがかかり、地域の防災力が向上する！

ー成果として得たこと

- ・隣接するマンションと初めてとなる合同訓練を行い、福祉避難所の開設に向けた動きを検証した。
- ・二次避難訓練で地域住民が沿道に立ち、児童生徒の安全な二次避難を見守る形を実現した。
- ・児童生徒が災害の確かなイメージをもち、自分で避難先を考えて避難する訓練を実施した。
- ・地域の様々な機関や防災に関連する企業の担当者と知り合い、連携を深められた。
- ・福祉避難所で活用できそうな製品を実際に見、詳しい内容を知ることができた。

ー全体の反省・感想・課題

訓練の実施に当たっては、感染が拡大した場合の対策を常に考えながら、諦めずに防災の取組を積み重ねた。防災の取組で心掛けたのは、ユニークなもの、地域との関係を深められるもの、である。手応えが得られたものもあれば、シミュレーション等、詰めが甘くて失敗したものもあった。思いが空回りし、「持続的に発展可能な福祉避難所開設マニュアル」の作成が遅々として進まなかった。



ー今後の継続予定

地域を巻き込んで進めてきた今年度の防災の取組を検証し、改善策を講じながら更に充実したものに。地域の様々な機関以外にも、優れた防災の取組を行っている専門家や企業を見いだし、連携を深めながら、スマートでスムーズな福祉避難所の開設という目標に向き合い、取組やマニュアルの整備に生かして、実際に機能する最適な形を追求する。

⑨愛知工業大学名電高等学校

プラン名

名電チャレンジ ～減らして防ぐ災害マニュアル～

プランの対象

高校生・地域

所在地

都道府県：愛知県

市町村：名古屋市千種区

ープランの目的・ここがポイント！

本校から避難するグラウンドまで約500m！その途中には駐輪場や横断歩道、細い道を通らなければならぬ…。校舎はガラス張りで開放的で明るい。だけど、災害時にはこのガラスが本当に安全なのか？本当に屋外に避難すべきなのか検証するべく立ち上がった8人の勇者MDPT(生徒)にお供のTTB(教員)。「名電のためのマニュアル」の作成プロジェクトが始まった。避難するならば、本当にこの経路でよいのか？避難する際にけが人がでたら教員はどうするの…？ガラスってどんな風に割れるの？割れそうなとき「危険だよ！」って周知してくれたいのに…！そんなみんなの疑問や思いを検証・実行してみました！

ープランの概要

- ・避難訓練時の要項の大幅な変更(避難時の貴重品持ち出し、けが人の設定、オリジナル動画作成)
- ・ガラス飛散防止装置の開発(ガラスの知識、実験)
- ・防災を通して企業の方々と交流(ガラスメーカー、設計事務所、区役所、大学)
- ・「MDPT」チームの防災力向上活動

ー期待される効果・ここがおすすめ！

この活動がきっかけで「防災委員会」の開設を実施する酔いとなっており、学校全体の防災力向上が見込まれる。生徒が主体的に協力し合いながら、防災力を向上することで1人でも多くの命を守ることができる。また、地域防災の中心として活動できるリーダーが多く輩出することが見込める。

ー成果として得たこと

- ・大幅な訓練の要項を変更したことで、様々な反響があった。これは避難に対して意識をしているととらえることもできる。また、けが人に関しては想定しておくことで事前に救命救急講習の必要性を感じた。
- ・周知に関して徹底ができていなかった。オリジナル動画を作成したものの、一瞬目にした生徒は多くいたが、内容を完全に把握した生徒は多くない。また、集団心理から何人かの生徒が間違っただけで判断してしまった場合、多くの生徒がつかれてしまう可能性があるため、周知方法の検討が必要である。
- ・装置の開発は、難しい
- ・防災を通して、多くの方々と交流することができた。

ー全体の反省・感想・課題

ガラス飛散防止装置の開発が想定より大幅に進まなかったことが反省点として挙げられる。しかし、避難訓練に関しては完璧なシナリオとはならなかったものの、大幅な前進をしたと考える。災害は待ってくれないため迅速な対応が必要とされるが、これらも検証を重ねながら改善を進めていきたい。後は防災チームの活動の継続が可能か、それが課題である。

ー今後の継続予定

2月に防災士の資格取得、3月には日本災害情報学会の参加を予定している。また、来年度4月にある火災訓練、防災委員会設立に向けて活動を継続していく。また、防災意識向上のための活動や地域と連携した活動を実施していきたいと考えている。そのため、新たな勇者MDPTの参加を募集する活動も精力的におこなっていききたい。



⑩愛知県刈谷市井ヶ谷町内会体育部

プラン名

教員養成大学の学生を育てる防災教育年間プログラムの開発
—町内防災運動会をととした「地域発」の学び—

プランの対象

大学生・児童生徒
地域住民

所在地

都道府県：愛知県
市町村：刈谷市

—プランの目的・ここがポイント！

教員養成大学の学生が、防災運動会や新春ウォーキングをはじめとする、年間をととした町内会の行事に参加することをととして、井ヶ谷町内の人・場所・出来事にふれながら防災教育の指導者になるための経験や資質の基礎を獲得する。防災運動会の競技の開発・運営・参加を通して、町内会や地域住民とともに、コミュニティの防災について考え、行動できる人材になることを支援するプラン。

—プランの概要

- ・年間を通して、井ヶ谷地域を知り体験することをねらいとした様々な活動に参加する。町内会の子ども会と連携した行事などで、教員養成大学の特色を活かしながら地域とつながる機会をもつ。
- ・プランの中心となる実践は、体育部が計画する「町内防災運動会」と「新春ウォーキング」で、どちらも歴史ある町内会行事である。チャレンジプラン採択を機に、防災に重点を置いた行事として、コロナ禍を含む3年（2020年度—2022年度）をかけリニューアルした。
- ・これらの活動をととした大学・地域の連携が、地域活動の単位化として、2022年度より大学のカリキュラムに正式に位置づけられた。

—期待される効果・ここがおすすめ！

- ・地域の既存の行事をベースに、町内会側から積極的な連携の提案をしてきたこと。学生団体（地域連携サークル）の協力のもと実践を進め、活動の単位化が実現したことで、継続性が期待できる。

—成果として得たこと

- ・歴史ある町内会行事である運動会の第40回記念大会と新春ウォーキングについて、町内の大学（災害時避難所）開催の実績ができたこと。参加した町民にとっては、避難場所やキャンパス内の防災設備を確認しながら防災意識を高める、貴重な機会となった。
- ・コロナ禍においても焦らず実践を進めてきたことで、3年ぶりの開催となった町内運動会は、前回実施2019年を上回る300人の参加となった。町内運動会の実施をととして、コロナ禍でどう地域の行事を継承していくかを町内をあげて考え、実践する機会を得た。
- ・大学生の協力のもと、運動会の動画配信やドローンを用いた撮影、ウェブと連携した防災マップの作成など、町内会の活動においてICTの活用が進んだ。
- ・地域活動の授業単位化の基盤となった大学と町内との連携を構築することができた。

—全体の反省・感想・課題

- ・運動会を実施できたことが、井ヶ谷町をあげての喜びと自信になった。町内に、住民同士、住民・学生の学びの雰囲気できたことで、実践の継続と展開の契機となった。
- ・今後も、町内会、自主防災会、体育部、消防団、子ども会等の組織が協力して、学生と大学を巻き込みながら活動を進め、今後、全国にモデルプランとして発信をしたい。

—今後の継続予定

- ・来年度の刈谷市「元気な地域応援交付金」事業の申請へ向け、運動会後に市のアドバイスのもと開催した住民会議で、今後の防災運動会をどう展開していくかについて議論した。大学での授業単位化も2年目となるため、選択履修者がよりよい学びができるよう、町内から提供できる活動支援について検討したい。



運動会後のふり返り（住民会議・12月）

⑪信州大学観光防災マップ活用グループ

プラン名

地域でつくる観光防災マップ

プランの対象

生徒・地域住民

所在地

都道府県：長野県

市町村：長野市

ープランの目的・ここがポイント！

地域住民と高校生が協働で作成した観光防災マップをもとに、フィールドゲーム大会の企画・運営を行い、参加者の防災意識向上、新たな地域防災活動の取り組みの獲得を目指す。

観光防災マップ作成に高校生が参加することにより、若年層の防災意識を醸成し、地域防災の担い手の裾野を広げていく。

ープランの概要

観光防災マップ作成にあたり、既存の観光や防災に関する情報や地図を収集し、その利点と欠点について各自発表。

観光と防災についての共通認識の構築をはかるために、学校周辺を活用し、観光ポイントとして活用できそうなものを全員で現地にて検討を行った。あわせて各グループや個人にて調査を実施行った。災害・防災の共通認識をはかるために、実際の危険箇所や災害現場を、当時災害対応を行った方に案内してもらったり、住民へのインタビューを行い実際の災害について意識してもらった。

その後各グループより観光防災マップのアイデアについて発表を行ってもらい、フィールドゲームで使用するマップや一覧データの発表をおこなってもらった。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

観光、防災に関するフィールドワークを複数回行い、共通認識を得たあとに高遠市街地を中心とした観光防災マップの作成を行った。これにより、観光・防災に対する共通認識を得ることができた。

ー成果として得たこと

観光防災マップ作成にあたり、観光、防災双方のフィールドワークを実施出来たことが、地域防災を意識してもらう上で、非常に有効であった。日常生活から防災を意識する方法として、観光や景観と連携して考えることも可能であることを知ってもらうきっかけとなった。

ー全体の反省・感想・課題

当初、11月の紅葉まつりにあわせて観光防災マップを利用したフィールドゲーム大会の開催まで進めることを目的としていたが、諸般の事情により開催できなかったことが、グループや生徒のモチベーションに影響してしまった面が大きかった。今後はこの点をいかにして克服していくかが、今後の課題となるだろう。

上記の反省はあるが、生徒が天候の良くない日も含めて地域を何度も調査したことで、地域住民への活動の浸透ができた。さらに住民と直接やりとりしたことで、地域の学校への期待やOBとの出会いから自分たちが自ら行うことの大切さを認識することができた。

ー今後の継続予定

3月に地元住民、高校OB・OG、伊那市観光協会、南アルプスジオパークガイドの方々への観光マップ発表会と活用に向けての意見交換会を実施予定である。意見交換会を経て、フィールドゲーム大会の開催を来年度の新1・2年生とともに目指す。



⑫文京 de BOSAI

プラン名

文京★こども防災スタンダードプロジェクト

プランの対象

こどもを中心とした
全ての地域住民

所在地

都道府県：東京都
市町村：文京区

ープランの目的・ここがポイント！

地域のこどもを通じて、その保護者および地域住民に「防災の大切さを伝える」とともに、「防災について考えるきっかけ」を提供することが目的である。東京23区の中心部に位置する文京区の特徴でありメリットのひとつが、「アカデミックな人材を含む多彩なリソース」である。これらを活用することで、都市部にありがちなデメリットである「希薄な地域力」の増強に取り組む。地域力×防災力の考えの下、地域力アップの取り組みを通じて「都市型の防災」の課題についても地域の皆で考えていく。

ープランの概要

- ・ 災害時にとらわれず、生きていく上でこどもたちに身につけてほしい能力（生き延びるための知恵）を「親目線」で検討し、その獲得のためのコンテンツを作成する。
- ・ 実践者がコンテンツを自由に組み合わせることで、地震災害時の様々な局面（年代・被災場所・事前・発災時・発災後）で活用できる対応力を獲得できるようなフレームワークを構築する。
- ・ こどもを中心に、地域の老若男女が一緒になってコンテンツを実践できるイベントを開催する。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

このようなフレームワークは、特定の地域の特定の課題にだけでなく、様々な地域の多様な問題解決に活用できる汎用性が期待される。

コンテンツ実施やイベント参加を通じ、普段は話題になりにくい「防災」について親子間で話し合う時間がもてるだけでなく、地域住民間でコミュニケーションを図る良い機会となることが期待される。

ー成果として得たこと

- ・ 数回のイベント実施後に行ったアンケート結果から、こども、保護者、地域の人、全てが、気軽に参加できる防災の機会を欲していることが、非常によくわかった。
- ・ イベント中の参加者の様子やアンケート結果から、こどもをきっかけにして、保護者をはじめとする地域住民を巻き込むというアプローチの有効性が実感できた。
- ・ 防災力を高める取り組み（地域力強化の取り組み）は、楽しいことだ！



ー全体の反省・感想・課題

- ・ コロナ禍の影響による集合型活動（イベント）での企画の停滞に対する対策不足
- ・ 教育機関との連携や教育機関へのアプローチ不足
- ・ コンテンツの整理が未完
- ・ コンテンツの効果に関するフィードバックの収集方法（未だ試行錯誤中）

ー今後の継続予定

- ・ 前述の残された課題を完成させ、「文京★こども防災スタンダード」を一般公開する。
- ・ 小学校PTAのOB組織と連携し、課外活動用のコンテンツの提案・サポート（実施）を継続する。
- ・ 区の防災課・教育委員会と連携し、4年生の防災宿泊に合わせたコンテンツ作成・提案を進める。

防災教育チャレンジプランに期待する

防災教育チャレンジプランが 2004 年に今の形になって 19 回目のチャレンジになります。これまで 350 近い優良な活動を支援させていただきました。そして、2015 年にはそれまでの成果を踏まえ、防災教育をしたいと思う人が、どう準備し、どう実行し、どう継続するかノウハウをまとめた「地域における防災教育の実践に関する手引き」を公開しました。同時に防災教育に関わるさまざまな団体と共同して防災教育普及協会も設立できました。最初の 10 年は防災教育を普及させる 10 年と位置づけています。そして 2014 年からの 10 年は東日本大震災からの復興の教訓も加味しながら防災教育を体系化する 10 年にしたいと思って活動しています。

防災教育チャレンジプランの成果は、毎年頻発する風水害や、21 世紀前半に発生が確実視されている南海トラフ地震や首都直下地震のような巨大な地震災害を乗り越える上での大きな資産です。こうした災害に立ち向かう主役は若い人たちです。若い人たちが、自分自身を守り、お互いに助け合い、災害を乗り越えていける力を育んでおくことが、この国の将来にとって不可欠です。これは学校だけの仕事ではなく、学校・地域・家庭が協力してさまざまな試みを重ねていくことが大切です。

今年度のチャレンジプランには、長引くコロナ禍にもかかわらず 37 団体の応募をいただきました。どれも素晴らしい内容でしたが、予算の制約があり、今回はその中から 12 団体のプランを選ばせていただきました。防災教育の内容をできるだけ多様にするプラン、いろいろな場所でできるだけ幅広い層が関われるプランへと成長してほしい「たね」を重点的に選ばせていただきました。選ばれた各団体はいろいろな面で「チャレンジ」し、今後の防災教育を推進する上での共通の資産を増やすために努力をしてください。

今回選ばれた皆さんのプランが今日をスタートとして、1 年間の実践を経て大きな実を結び、来年 2 月の活動報告会に成長した姿で戻って来てくださることを期待してやみません。

防災教育チャレンジプラン実行委員長
国立研究開発法人 防災科学技術研究所 理事長

林 春 男

我が国は、地震、台風、豪雨、火山噴火など様々な災害に見舞われやすい国土にあります。2011 年の東日本大震災や 2016 年の熊本地震などの地震災害をはじめ、2018 年の西日本豪雨、2019 年の東日本豪雨、昨年も 7 月・8 月の大雨による河川氾濫、土砂災害など、毎年のように豪雨災害もあり、自然災害は各地で頻発化、激甚化しています。

このように、我が国を絶え間なく襲う災害から、皆さんが命を守り抜き、被害を最小限に抑えていくためには、災害への備えが欠かせません。行政による「公助」はもとより、一人ひとりが自分の身は自分で守る「自助」、地域で助け合う「共助」、そしてこれらを組み合わせることが災害に強い社会や地域を作っていく上で大切なことです。

さて、今年は大正 12 年（1923 年）に発生した関東大震災から 100 年の節目の年にあたります。さまざまな行政機関、研究機関、民間団体等で、関東大震災 100 年にちなんだ行事等が行われ、「関東大震災 100 年」といったフレーズを目に触れる機会も増えるかと思います。一方で、南海トラフ地震や首都直下地震、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震などの巨大地震発生の切迫性も高まってきており、巨大地震や津波をはじめ、大災害への備えを強化することは、今私たちにとって、とても大切なことです。

一人ひとりが、過去の災害から学び、それぞれの地域に合わせた備えを行ってこそ、社会や地域の防災力の向上に繋がります。そういった意味でも、常日頃から災害としっかり向き合い、地域や学校で防災・減災の実践的な防災教育を行っていくことがとても大切です。

おかげさまで、この防災教育チャレンジプランは、多くの関係者のご支援により今年で 19 回目を迎えることになりました。実践団体に選ばれた 12 団体の皆さんには、地域の防災活動の主体者としてそれぞれの防災教育にぜひチャレンジしていただき、地域防災力の向上に寄与されることを心よりご期待申し上げます。

防災教育チャレンジプラン実行委員
内閣府政策統括官（防災担当）付 参事官（普及啓発・連携担当）

村 上 威 夫

2023 年度実践団体の紹介

2023 年度防災教育チャレンジプラン 実践団体

【1】X-Bridge プロジェクトグループ

プラン名

橋梁流失リスクのオープンデータから始める気候変動適応ワークショップ「X-Bridge」

応募部門

高等学校の部～大学・一般の部

所在地

兵庫県神戸市



一目的・特徴等

気候変動に伴う水害の激甚化により、橋梁の流失リスクが増大しています。本活動では、自らの住む街を知り災害に備えるため、GISオープンデータを利活用するワークショップを通じて、市民が水害時流失リスクの高い橋梁を可視化し、防災意識向上ひいては総合的な気候変動適応に貢献します。ワークショップの教材もオープンソース化することでこのような取り組みの実施を促進し、ローカルデータがGIS上に集約され、研究に活用されていく仕組みの事例化を狙います。



一団体紹介

X-Bridge チームは、神戸情報大学院大学の研究チームとして発足、各分野の社会人有志が集まり、中部大学国際 GIS センターや BCorp である（株）オシンテックの支援を受けつつ非営利で活動を進めてきました。橋梁の専門家、気候変動の研究者、オープンサイエンス、シビックテック、社会起業家等という多種多様なバックグラウンドとスキルを持つメンバーで構成され、専門領域にとらわれない越境的思考で解決策を導く事を旨としています。直面する気候変動への適応のため、ソフト・ハード両面での活動を推進し、積極的に提案・行動する大人の部活的な研究チームです。

【2】兵庫県立明石北高等学校

プラン名

SDGs×防災で未来を拓く

応募部門

高等学校の部

所在地

兵庫県明石市



一目的・特徴等

1. 地理総合で「持続可能な地域づくり」と「防災」を関連付けて学び、地域の自然環境と社会環境を踏まえた防災力を身につける。
2. SDGsと防災の共通点（＝誰一人取り残さない）に着目し、我がこと意識を持って社会の課題と向き合い、ダイバーシティを実現する人材を育てる。
3. 明石市が掲げる「SDGs未来都市計画」と「強靱化地域計画」の関連性を高校生の視点で検証し、専門家の指導助言も取り入れながら「SDGs×防災」の取り組みを提案する。



一団体紹介

生徒一人一人が持続可能な社会づくりの担い手としての自覚を持ち、国際社会や地域活動に積極的に参画・貢献できるよう成長することを目指しています。そのため各教育活動に SDGs の観点を取り入れ、グローバルな発想で主体的・協働的に課題解決に立ち向かう力を大切にしています。令和4年度から兵庫県中高生防災ジュニアリーダー育成事業に加わり、生徒主体の活動を進めています。また、スーパーサイエンスハイスクール事業を軸とする教科横断的な学習や地域における学びと発信を通して、探究力を中心に総合的な力を磨いています。



【3】関西学院千里国際中高等部

プラン名 「防災 × STEAM コンテンツ」 高校生から小中学生へ

応募部門 高等学校の部

所在地 大阪府箕面市



一目的・特徴等

高校の総合的な探究の授業、地理総合、情報、家庭科、理科の授業で活用できる防災・減災の授業案を作成する。そのためのコンテンツを収集する。コンテンツは主に Youtube ライブラリーとし、無料で使えるものとする。可能なら 防災のビジネスモデルを考える（産学連携実施）アウトプットとして他校（国内・国外）との実践発表の交流を図る（具体的には 多賀城高校やインドネシアの高校、防災甲子園などと交流を図りたい）

一団体紹介

本校は、帰国生や外国籍の生徒を広く受け入れており、更に敷地内に併設されている大阪インターナショナルの生徒を含めると、一般生徒、帰国生徒、外国籍生徒の割合は各3分の1になる。「両校は世界に貢献する人材を育むという同一のスクールミッションを掲げ、一部の授業や課外活動をもに行っている。そこで生徒たちはボーダーレスな国際感覚を身に付けていく。また自主性を養う教育を重視しておりグローバルリーダーの育成を目指し、SGHの指定を受け、探究活動のプログラムを必修化した。探究活動の中に防災・減災のプログラムも取り入れている。



【4】淑徳大学 地域共生センター

プラン名 地域と共に大学の避難時対応について考える
～淑徳大学のファーストミッションボックス～

応募部門 大学・一般の部

所在地 千葉県千葉市



一目的・特徴等

地域共生センターにて今後展開される事業の1つである「災害支援活動」や「支援環境整備」は、学生・教職員・卒業生等の様々な立場からの「災害」の意見を共有しながら模索し、今後起こりうる災害の支援体制を構築していきます。

災害時に避難所となりうる大学の地域貢献のあり方の検討と学習を在学学生・教職員・地域住民と一緒にファーストミッションボックスの作成やワークショップ、実践を交えながら進めていきます。

一団体紹介

他者に生かされ、他者を生かし、共に生きる「利他共生」の精神のもと、社会福祉の単科大学から始まった淑徳大学は、2023 年度に首都圏に4キャンパス、7学部13学科を擁する総合大学として大きく進化します。

また、「建学の精神の行動化」をいっそう推進するため、地域支援ボランティアセンターを発展・強化させ、新たに地域共生センターを開設します。地域の活動、体験を通して「他者と向き合い、共に生き、生かし合う社会の実現と、生涯にわたり地域社会貢献するという生き方」を学ぶプログラムを全キャンパスで展開していきます。



【5】石巻市立桃生中学校

プラン名 伝えよう震災の記憶、感じよう命の大切さを

応募部門 中学校の部

所在地 宮城県石巻市



一目的・特徴等

東日本大震災について調べ学習を行い、改めて防災の大切さと命の尊さ・大切さについて深く考え、それを他に発信していきます。調べ学習や意見交流を通し、生徒自身が震災の記憶を語り継ぐ担い手となることで、地域防災を支えていく自覚を高めます。また、地域や小学校と連携した取組を展開することで、地域全体の防災への意識を醸成していきたいと考えています。

一団体紹介

桃生中学校は、宮城県石巻市の北西部に位置し、北上川と旧北上川に周りを囲まれ、緑豊かな自然の中に立地しています。開校から53年目を迎えた町域にある唯一の中学校で、地域の期待も厚く、脈々と地域の伝統文化を継承している伝統ある学校です。すすめ踊りの源流とも言われている伝統芸能「はねこ踊り」が特に有名で、地域と連携した取組により全校生徒が踊りを心得ており、行事で披露することが地域の風物詩となっています。石巻市民として東日本大震災の記憶を語り継ぎ、命の大切さを発信できるよう学習に取り組んでいます。



【6】下北 BOUSAI ネットワーク（むつ市内4校合同プロジェクト）

プラン名 グローバル社会における「防災教育」

応募部門 高等学校の部～大学・一般の部

所在地 青森県むつ市



一目的・特徴等

東日本大震災から11年。震災が歴史となりつつある今、東日本大震災の記憶を後世に伝えると同時に、防災教育の普及・拡大を目的として、むつ市内にある県立学校4校が協同して取り組むプロジェクトである。地域の生徒の防災意識の高揚と知識、技術の定着だけでなく、災害時に災害弱者になる可能性のある障がい者、高齢者、外国人などに対応した、グローバルな防災教育について研究・実践、ネットワークの構築を目指している。

一団体紹介

下北 BOUSAI ネットワークは、青森県むつ市にある県立学校4校（大湊高校、田名部高校、むつ工業高校、むつ養護学校）が協同でプロジェクトを進める組織である。成立は2022年1月に実施した、市内4校合同・震災から学ぶプロジェクト（被災地訪問及び防災研修）である。以降、市内4校での合同報告会、各学校での活動という、全体と個別を組み合わせた形で進めている。地域の防災はもちろん、多様化・グローバル化する社会の構成員すべてを守るため、各学校の特色・強みを生かし、防災教育を進めるユニークな防災ネットワークである。



【7】出張！ふれあいルーム

プラン名

災害時を想定した車中泊プロジェクト（プチ家出の練習♡）

応募部門

大学・一般の部

所在地

和歌山県上富田町



一目的・特徴等

災害時の車での避難は推奨されていませんが、車社会に暮らす高齢化地域の私たちは、車を選択する可能性が高いと思われます。

あえて、「災害時に車を使うこと」を選ぶのであれば、地震と豪雨災害を分けて考え、どんな知識と準備が必要か、車を使ってはならない状況を見極めるためには、どんな学習が必要かを考え、共有し、実際に試すことで、車での避難時の事故や、災害関連死となることなく安全、快適に過ごすことを目的としています。

一団体紹介

大人と親子を対象に、防災とは本来は自分のためのもので、日常のあらゆることが「防災＝生きるチカラ」に繋がっていることを知り、防災を心から楽しんでいる団体です。ラインや ZOOM を使って、同日にそれぞれの場所で災害時を想定した車中泊訓練をしたり、互いの得意分野を教え合ったり、本や備蓄グッズ、トイレにまつわる実体験などの情報交換などを行っています。更に、それぞれが所属している団体との新たな繋がりも増えました。

同じ地域で頑張る仲間も大切ですが、遠くの仲間ともこのように繋がることで、活動の幅や可能性が広がっています。



【8】岡山市立操南中学校

プラン名

「操南中&防災チャレンジ with “よりそい愛”」

応募部門

中学校の部

所在地

岡山県岡山市



一目的・特徴等

「操南中&防災チャレンジ with “よりそい愛”」では、地域住民の方々とともに、「わが町・操南」をより持続可能なかたちで創っていくという思いから、「つながり・よりそう」視点を本プランのコンセプトとしています。生徒たちが地域や外部・専門機関等との繋がりのもとで取り組んでいるSDGs推進活動や防災・減災に関わる学習を生かし、生徒たちの心をさらに動かす「防災キャンプ」を地域の住民の方々と共に創出し、多方面へと情報発信していきたいです。

一団体紹介

本校は、1947 年創立の生徒・教職員 850 名強を擁する、岡山市街地南方にある公立中学校です。「操南中学校 SDGs 宣言」（2021 年生徒会採択）以来、総合的な学習の時間（操南タイム）および生徒会活動を軸とした、持続可能な地域・社会づくりに繋がる教育活動を展開しています。

防災・減災に関わる学習では、東日本大震災、西日本豪雨災害、阪神淡路大震災などを通して、多面的に災害について学んだ上で、地元住民の方々と連携・協働した参加型・対話型の学習活動を行うことで、学校一地域、世代間のつながりを大切にした地域防災学習を目指しています。



【9】東京都立調布特別支援学校

プラン名

コロナ禍における持続的に発展可能な福祉避難所開設計画Ⅱ

応募部門

小学校の部～中学校の部、大学・一般の部

所在地

東京都調布市



一目的・特徴等

地域のニーズに応えられる福祉避難所の、スマートでスムーズな開設の仕組みづくりをします。本校・行政・大学・地域住民等が福祉避難所の開設という共通の目的で連携し、協議や訓練を重ねて災害時の実践的な対応力を磨き、「福祉避難所開設マニュアル」を整備します。入口を遠隔で開錠する仕組みの改善や、特別支援教育のノウハウを生かした避難者が安心できる空間の実現等、コロナ禍の福祉避難所開設の最適な形を追求します。

一団体紹介

本校は1976年開校の、知的障害がある子供のための都立特別支援学校で、小学部・中学部合わせて170名近くが学んでいます。通学区域は調布市・三鷹市・狛江市で、「『地域』に生き、ともに伸びる学校」というスローガンを掲げ、地域と連携した教育活動を通して共生社会の実現に向けた基盤づくりを行っています。地域とのつながりが深く、調布市、近隣の市立小学校と国立大学、隣接するマンションとの間に、それぞれ防災協定を結んでいます。本校の児童生徒を応援する地域住民によるボランティア組織もあり、様々な協力を得ています。



【10】泉南市立西信達中学校

プラン名

みんなでたすかる～つながる防災プロジェクトN～

応募部門

中学校の部

所在地

大阪府泉南市

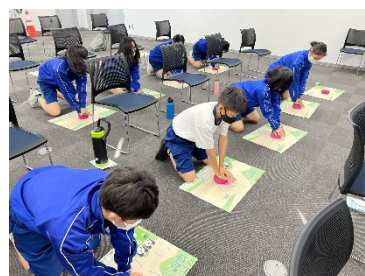


一目的・特徴等

防災学習を学校教育の柱とし、中学生とともに地域の防災活動に取り組むことで、家庭や地域の防災意識を高める。保育所・小学校・中学校、保護者、地域のつながりを意識し、交流を主とした活動を展開する事で、実践的で地域にあった防災学習・防災プランを共に生み出す。また、「楽しみながら、防災を！」を合い言葉に防災学習を計画し、中学生の気づきと探求活動をサポートする。西信達地域で長く続いていく新たな防災教育・地域防災行事の骨格を作る。

一団体紹介

本校は、泉南市の北西部に位置し、西側は大阪湾に接しています。生徒数は169名の小規模校です。また、校区は1小学校・1中学校で構成され、元々は漁業や農業が中心で地域としての絆が強い所です。近年新興住宅や大手スーパーが建設され、地域の生活環境も大きく変化しています。海に近く、素朴な土地柄であり、総じて明るく、親しみやすい人柄の生徒が多く、「自分のよさを他者のために生かす活動」として防災教育を実践することで生徒の自己実現を応援し、中学生の力を地域に活かしていきたいと思っています。



【11】よんなな防災会学生部

プラン名

防災人材輩出のための防災キャリア教育

応募部門

中学校の部～大学・一般の部

所在地

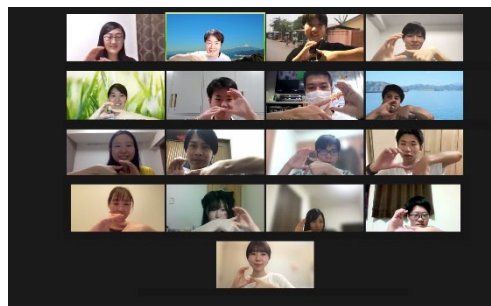
静岡県静岡市



一目的・特徴等

災害が多発する日本では、これからの時代を生きる若者の防災意識の向上、人材育成、防災に関わる若者の増加は喫緊の課題です。本プランでは、多様な防災への関わりを行う方を紹介し、より多くの学生に防災に関する仕事を知ってもらい、防災キャリアへの関心を持ってもらう機会を創出することが目的です。

社会人や学生同士での対話を行うことで、自分なりの防災との継続的な関わりを創出します。ひいては、若者の防災アクターの増加が期待できます。



一団体紹介

47都道府県の公務員をはじめ、地域防災の担い手や民間企業の方、学生等が参加している「よんなな防災会」を母体とし、全国の防災に関心のある学生が集い、交流を図る会です。

全国各地の学生が防災・減災をキーワードにイベントや交流会を通してつながることで、防災活動の輪を広げることを目的としています。主な活動は、「防災知識の習得・共有」「防災関連の意見共有会」「交流会」の3つです。これらの活動で生まれたつながりから新たな活動への発展や連携を目指しています。現在、約80名の学生（中学生～大学院生）が参加しています。

【12】見てみようよ！常総市の会

プラン名

オープストリートマップ水害地図充実化から始める『(Web 上) 常総水害ボランティア顕彰館』構築準備事業

応募部門

大学・一般の部

所在地

茨城県常総市



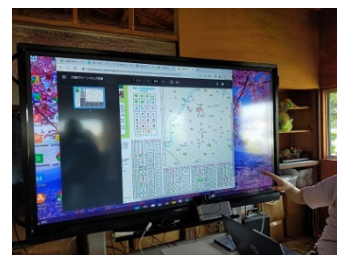
一目的・特徴等

平成 27 年関東東北豪雨災害から 7 年となる常総市において、2022 年度は水害記憶の次世代継承のため、web 上の無料プラットフォーム「オープストリートマップ (OSM)」を活用した「発見街歩き地図作りイベント」とその後の OSM への随時書き込み可能化を、観光振興と抱き合わせたかたちで推進した。2023 年度はさらなるコンテンツを収集、OSM 充実化を図り Web 上『常総水害ボランティア顕彰館』構築のための資料ソースと構築企画者を含めたネットワークを強化し、同資料館サイトの構築プランを練る準備へ着手する。



一団体紹介

当会は、平成 27 年関東東北豪雨で鬼怒川堤防が破堤、市内中心部が大洪水に見舞われた茨城県常総市において、水害の記憶を消し去る復興ではなく、水害記憶を継承しながらの復興を望む市民活動団体として設立。市内の各地（許可を得た場所）に当時の高水位の高さを示すステッカーを貼る参加型スタディツアー「ステッカーツアー」や、川と街を舞台にしたガイドウォーク、カヌー体験等の水害継承イベントを実施してきた。2022 年度から web 上の無料地図「オープストリートマップ」を活用した取組を実施してきている。



2022 年度 審査委員の紹介

委員長	渡邊 正樹	東京学芸大学教職大学院 教授
委員	安藤 雄太	東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー
委員	安藤 慶明	国立研究開発法人防災科学技術研究所 理事
委員	池内 幸司	東京大学大学院工学系研究科 教授
委員	上村 昇	内閣府大臣官房審議官（防災担当）
委員	小正 和彦	全国連合小学校長会 庶務部長／横浜市立みなとみらい本町小学校 校長
委員	佐竹 健治	東京大学 地震研究所 所長・教授
委員	重川 希志依	常葉大学大学院環境防災研究科 教授
委員	嶋倉 泰造	東京海上ディーアール株式会社 代表取締役社長
委員	戸田 芳雄	学校安全教育研究所 顧問／日本安全教育学会 理事長
委員	林 春男	国立研究開発法人防災科学技術研究所 理事長
委員	福島 隆史	株式会社 TBS テレビ報道局社会部兼解説・専門記者室 解説委員
委員	森田 公剛	日本電信電話株式会社 技術企画部門 災害対策室 室長
委員	山崎 登	国土舘大学防災・救急救助総合研究所 教授
委員	山本 竜太郎	東京電力ホールディングス株式会社 常務執行役
委員	米田 徹	日本ジオパークネットワーク 顧問／新潟県 糸魚川市長
委員	米村 康	東京ガスネットワーク株式会社 防災・供給部 部長

（2022 年 11 月 30 日現在、50 音順、敬称略）

防災教育チャレンジプラン募集の御案内

1. 募集の概要

防災教育チャレンジプランでは、全国で取り組まれつつある防災教育の場の拡大や質の向上に役立つ共通の資産をつくることを目的に、新しいチャレンジをサポートいたします。

そのプランの準備・実践に当たって発生する経費を支援し、実現に向けた防災教育チャレンジプランアドバイザーによる対面またはオンラインでのアドバイスや相談などの支援を行います。

応募の中から選ばれたプランは、活動計画について前年度の活動報告会で発表、さらに実践した内容について、交流フォーラム(中間報告会)と活動報告会で発表していただきます。

活動報告会においては、優秀な実践活動に対して防災教育大賞・防災教育優秀賞・防災教育特別賞を授与いたします。

これからの時代の防災教育として、オンラインやオンデマンドを活用した活動など、様々なチャレンジをサポートし、その成果はホームページなどで幅広く公開します。

2023 年度の防災教育チャレンジプランでは、新型コロナ禍を新たな「まなびのきっかけ」とするチャレンジを積極的に募集いたしました。内容としての新型コロナ禍を選ぶだけでなく、新型コロナ禍がきっかけとして生まれた「まなびのスタイル」を活用したオンライン型やオンデマンド型のチャレンジも歓迎です。

みなさんのチャレンジをお待ちしています。

サ ポ ー ト 内 容	■プランの実践にかかる経費の提供／上限 30 万円(査定による) ※経費は、実践活動終了後の「完了払い」となりますので、活動期間中は各実践団体での立て替えとなります。 ※活動・予算計画書の提出及び団体名義の口座が必要となります。 ■交流フォーラム(中間報告会)・活動報告会発表者への交通・宿泊費の支給。(1名分×3回分) ※社会情勢等によりオンライン開催となった場合はタブレット、wifi ルーター等の機材を貸与します。 ■プランの実現に向けて、下記サポート主体が対面・オンライン問わず 助言や現地指導等の支援を行います。 ■防災活動の手法・事例の収集と活動情報の発信ができる各種 web ツールを提供します。
サ ポ ー ト 主 体	■防災教育チャレンジプランアドバイザー ・防災教育チャレンジプラン実行委員 ・防災科学技術研究所研究員 ・サポーター(過去の実践団体) ・その他防災教育専門家等 ■防災教育チャレンジプラン実行委員会事務局
表 彰	■活動プロセス及び成果に対して審査を行い、優秀な実践活動に対して、防災教育大賞・防災教育優秀賞・防災教育特別賞を決定し、表彰状と盾を授与いたします。 ■防災教育チャレンジプラン「サポーター」として認定いたします。

2. 応募資格

- 防災教育を一層充実させたいと考えている教育・社会福祉施設(保育施設・幼稚園・学校等)、教育委員会、NPO、民間企業、個人、地域団体(民間事業所、各種団体、行政機関)
- 採用された場合は、開催予定の実践団体決定会、中間報告会、活動報告会の計3回の会合に出席できること。
- オンライン開催となった場合、参加可能なインターネット環境(通信回線、機材、アプリケーション等)を用意できること。

3. 応募部門(プランの対象別)

- | | | |
|---------------|-------------|-------------|
| A. 保育園・幼稚園等の部 | B. 小学校低学年の部 | C. 小学校高学年の部 |
| D. 中学校の部 | E. 高等学校の部 | F. 大学・一般の部 |

4. 募集期間

毎年8月頃～11月頃に募集。詳細は、ホームページ上でお知らせいたします。



防災教育 チャレンジプラン

■ 防災教育チャレンジプラン実行委員会事務局
E-mail : cpinfo2865@bosai-study.net

■ 防災教育チャレンジプランホームページ
<http://www.bosai-study.net/>

※E-mail アドレスは、予告なく変更することがあります。
最新情報は、ホームページでご確認ください。